

3-7 カムイユカラ「ハラトンナ」解説

語り手：貝澤とうるしの
聞き手・解説：萱野茂

萱野：私は一頭のシロクマでございました。家族は……この **kamuyyukar** [神謡] の場合は、神様自身が自分のことを語っている事が **kamuyyukar** [神謡] で、今この場合、**sakehe** [リフレイン] がハラトゥンナと言うの繰り返しです。そのハラトゥンナの繰り返しの中で、**kamuy** いわゆるクマ自身が物語っている。

クマはクマなりに、神の国では、人間がアイヌが生活しておると全く同じように生活しておるわけです。

私たちクマ夫婦は、非常に仲良く暮らしておった。そうしておるうちに、いい男の子が生まれたので、その子供を大切に大切に育てて、何不自由なく生活をしておった。ある日のこと、弟の神様から……弟からだな？

貝澤：うん。

萱野：弟から招待状が……招待が来て、酒を作ったので、どうぞ遊びに来て下さい。

貝澤：兄貴から、

萱野：兄貴からか。兄貴からだな。

貝澤：兄貴、赤いクマだ。

萱野：ああ、そうか。兄貴の方のクマから招待が来て、そして、是非どっさりお酒を作ったので、飲みに来て下さい、と、そういう言づけが来たので、留守番の家内によく言いつけて、「子供を大切にしておってね」、と。私は **ikutasa** と言って、お酒を飲みに行つて来ますからね、と。そう言つて出た。

その間に、留守番をする神様は、**tar** [背負い縄] と言って、山へ行くときに荷物を背負うところの縄を一生懸命編んでいる。それをあちらへ

返し、こちらへ返ししながら編んでいる。そのうちに、どうしたのか子供が火のついたように泣き始めた。それをいくらあやしても泣き止まない、と。そういうふうにしておる所で、話が変わって。

私は一人のアイヌでありました、と。家の近くを歩いておると向こうの方から一頭のシロクマがこうゆっくりゆっくり来ている。見るとそのクマは、すごく大怪我をして、もう内蔵物は出ていわゆるその大腸も小腸もこう地べたに引きずるようにして、向こうからその怪我をしたクマが来ておる。

私は **tasiro** [山刀] を抜いて、アイヌはそういうことを **ukewehomsu** と言うんですけれども、何とというか、日本語訳にこの **kewehomsu** ということば非常に難しくって、**yukar** [英雄叙事詩] に出てくる場合であれば、「ねぎらう」というふうに私は訳しておりますが、「どうしたんですか、クマの神様、あなたがそういうことをして来ているのはただ事ではありませんね」という意味のことを言いながら、**tasiro** [山刀] を持って、こう胸に、右手を伸ばしてそれを胸に引きつけ引きつけ、そのどうしたんですか、と言うと。

そのクマも立ち上がって、私のやると同じように、前手を突き、前足を突き出しながら言う事には、「私は神の国に住んでおるクマでした。それが兄神から招待を受けましたので、飲みに行った、と。そうしたらたくさんのご馳走が出たので、そのご馳走を私の家内に私の子供にとおぼして、それをこう美味しい所をよそへよけた。そうしたら、兄神の言うのには、いいもんだなあ、あなたは。家内がおっていいものだなあ、あなたは。子供がおって、そういうふうにご馳走を残す人がおって、というふうに、言いがかりをつけて、私に喧嘩をふっかけてきた、と。我慢したんだけど我慢しきれずに、喧嘩をしたんだが、もうこうなれば生きることではできないんだ、と。だからあなたは非常に精神のいい人なの知っておりますから、どうぞ私に矢を向けて撃って下さい、と。それによって、私は神として蘇生して、神の国へ帰りますから」と、そのように言いましたので、私は早速弓矢を取って撃った。

そうすると、私の家近くへそのクマが来て、**nusasan** と言って、外の祭壇近くへ来て、まあ、**sumawne** [獲物となって]、死んだ。それをちゃんと皮を剥いで、型通りにお祈りをしてお祀りをした。

そうすると、その晩に夢枕に立った、クマは、「お蔭さんで、あなたのお陰で本当に私は神として神の国に帰る事が出来ました。これからはあなたをお守りしますよ。本当にどうもありがとうございました」と、いう夢を見せてくれた、と。

そして、その私は何不自由なく生活をしておりました、と。いわゆるクマ神が、神の国での生活、そして、神の国での生活の中で、クマの連れ合いである人は、アイヌの国でアイヌのおばあさんがしておるように、アイヌの婦人がしておるように、山へ持っていくところの荷縄と言われる、その縄を一生懸命編んだり織ったりしておる様がこの **kamuyyukar** [神謡] の中ではよく出ておるわけですね。

今の場合、これ **kamuyyukar** [神謡] と言って、繰り返しがハラトゥーナ、というふうに言っておるわけでした。 **kamuyyukar** です。

それではテープ番号第3巻、これで終わります。昭和44年1月23日、録音者および……採録者および和訳、萱野茂。